

農 大 情 報

平成24年 6 月号

編集発行：愛知県立農業大学校

東海近畿地区農業大学校学生スポーツ大会 で好成績を納めました



平成24年度東海近畿地区農業大学校学生スポーツ大会和歌山大会が、5月31日、6月1日の2日間にわたり、和歌山県の橋本市運動公園と南馬場緑地広場の2会場において開催されました。

同大会は地区9府県の農業大学校学生約500名が参加をする大きな大会です。本年度は本校から選手、職員あわせて76名が参加しました。

大会競技は、野球、バレーボール、バスケットボール、卓球、バドミントン、テニスの6種目で行われました。

例年、他校からは打倒愛知の厳しいマークが敷かれるなか、当校学生も日頃の練習の成果を遺憾なく発揮し、白熱した試合が繰り広げられました。

結果は、団体戦ではバレーボール、卓球、バドミントンの3種目において優勝、バスケットボールが準優勝、野球、テニス3位入賞でした。

個人戦においても、卓球シングルス男女、バドミントン男子シングルス、女子ダブルスで優勝、バドミントン男子ダブルス、テニス男子シングルス、ダブルスで準優勝、

バドミントン女子シングルスで3位入賞など、昨年度に引き続き各種目で優秀な成績を収めました。

2泊3日の大会旅行によって、スポーツを通じた他校との交流や、参加学生相互の絆を深めることができました。

来年度は9年ぶりの愛知県大会となります。他校選手団を万全の体制で迎えらるよう準備を進め、開催校として立派な成果が得られるよう練習にも力を入れてまいります。(森 真太郎)

研究科山岡君が海外研修を報告

研究科1年の山岡鷹靖君は、国際農業者交流協会の派遣研修生として1年間ドイツで農業研修を受けていました。このほど復学し、6月1日に開催された愛知県国際農友会総会後の帰国報告会で研修状況を報告しました。

山岡君は、ドイツのバイエルン州ニュルンベルクの果樹農場とボンで研修をし、独特の気候風土や社会経済環境の中で営まれるドイツ農業の特徴や農場での早朝から夜遅くまでの仕事や異文化体験などで得られた貴重な経験を話し、最後に大変有意義だ



ったので多くの若者がこの研修に参加してほしいと報告を締めくくりました。

愛知県国際農友会は海外農業研修生の派遣や受入を行っている組織で、過去に海外研修へ派遣された者が会員となっており、60年前から海外派遣研修が実施されています。(竹内賢寿)

農学科学生がカリフォルニア州立大デイビス校（UCD）学生と交流



毎年、UCDが「日本のポップカルチャーと伝統」をテーマとした4週間にわたる夏季講習を、農大に隣接した愛知県青年の家を拠点として実施しています。

今年も22名が参加をし、6月25日から7月20日までのプログラムが生まれ、初日の6月25日には農大での専攻実習を体験しながら、農学科学生と交流する機会が持たれました。

作物専攻では農産加工演習として「ソバ打ち」実習、果樹専攻ではモモの収穫実習、施設野菜専攻ではトマトの収穫実習、酪農専攻では子牛の給餌実習を体験しました。

来日間もない若者にとってすべてが初めての体験であり、専攻生と身振り手振りのコミュニケーションながら、双方が有意義な時間を過ごすことができました。

また、夜には本校学生会が主体となって、軽音部の演奏とカレー作りによる夕食会、

そしてドッジボールによる交流が行われ、楽しい時間を過ごしました。

4週間の間、クラブ活動等を通じて、さらなる交流と相互理解が図られることを期待します。(柳澤淳二)

「売り上げを伸ばすラベルの工夫」を熱心に学ぶ農業者

消費者にアピールするラベルやポップ作りは、直売農家の重要な技術です。

研修部では、オープンラボラトリー研修としてコンピュータを使ったラベルとポップ作成の講座を開催したところ、女性12名を含む17名が受講しました。

講師からは、①ポップは目立つように作成するので、好きな書体を用いて良いが、説明するコメントは明朝体、ゴシック体、教科書体のような読みやすい書体を用いること、②自分の店であれば、店内全体の統一感を大事にすること、③値段を表示する際の¥サインは、値段の数字の文字高の半分程度とすること、といったアドバイスがありました。

今回は、ラベルやポップ作りの技能中心の内容でしたので、次回は「売り上げを伸ばす」ポイントについて、もっと知りたいという意見が聞かれました。

(石代正義)



農学科専攻紹介

農学科は8専攻を設置しております。今回は鉢物・緑花木専攻と養豚・養鶏専攻の2専攻をご紹介します。

鉢物・緑花木専攻

鉢物・緑花木専攻では、4棟のガラス温室や遮光ハウスなど約1,500㎡の施設、600㎡の露地ほ場で、100種類以上の観賞用植物を栽培しています。主な品目はシクラメン、アンズリウム、シンビジウム、コチョウラン、フッキソウです。

本専攻の学生は、現在14名です。普通高校出身者も多く、入学当初には花の名前をほとんど知らない学生もいますが、2年間毎日のように植物に接することで、全員が自然に栽培の知識や技術を身に付けていきます。

本専攻では、1年生の8月までは全ての植物の栽培管理を学び、9月に鉢花、観葉、洋ラン、緑花木の4部門から担当部門を決めます。そして専攻担当職員と話し合いながら、責任を持って部門植物の栽培管理を行っていきます。たとえば観葉植物では、学生からの要望で新品目を導入することがしばしばあります。また学生が管理実習中に、病害虫の初期発生を確認することもあります。



シクラメンの鉢上げ実習

部門開始と合わせて、調査研究学習（プロジェクト学習）の検討を始めます。テーマは新たな栽培方法の検討、交配、系統選抜など様々ですが、いずれも単なる調査ではなく、品質向上や低コスト化、省力化など実際の農業経営向上に繋がるものとしています。

本年度はサイネリアの底面給水栽培に適した用土配合割合の検討、施肥の違いがステビアの食味に与える影響、シクラメンの摘葉が副芽発達に及ぼす影響などをテーマに取り組んでいます。そして、取り組んだプロジェクトの中の1つを卒業論文としてまとめ上げます。

手塩にかけて育てた植物をいかに売るかも、農大の重要な学習内容の1つです。地元市場への出荷と農大体育館で行う直売がありますが、本専攻では特に直売に力を入れています。

客に直接学生が対応しますが、客からは「この花は地植えしても大丈夫？」「来年も花が咲くの？」「どこに置けばいいの？」など、様々な質問が飛んできます。これに的確に回答するのはもちろん、どんな客にもこやかに対応することが必要で、販売技術の習得の機会になっています。



毎度ありがとうございます！

養豚・養鶏専攻

養豚・養鶏専攻の一年生4名、二年生7名の計11名は、少人数の濃密な学習環境の中で楽しく専攻実習に取り組んでいます。一年生は、秋まで豚の飼育方法と鶏の管理方法の両方を学びます。その後、プロジェクト学習が始まるころには、養豚コースか養鶏コースを選択し、一方の畜種を専門的に学び、卒論の執筆となります。

愛知県の養豚は全国10位の生産があり、養豚農家は味や品質で消費者にアピールできる銘柄豚の生産に熱心です。このため、養豚コースでは愛知県（農業総合試験場）で系統造成されたランドレース種「アイリスL3」、大ヨークシャー種「アイリスW2」、デュロック種「アイリスナガラ」の3種類の豚を用いた三元交配豚を生産して、安全でおいしい豚肉を生産することを学習しています。

また、専攻生が一人一課題を設定して卒論としてまとめ上げる「プロジェクト学習」では、養豚経営の改善や環境面への対策などもテーマとして取り上げ、「くず米をエサに混ぜて輸入トウモロコシの代替が可能かどうか」や、「微生物資材をエサに混ぜて給与することで肥育成績やふんの臭い軽減に効果が見られるか」などの課題に取り組んでいます。



養鶏コースでは実習のため、愛知で造成された「卵用名古屋コーチン」を主体に五種類の鶏種を飼養しています。愛知県は鶏卵の生産全国7位で、古くから養鶏が盛んでした。最近では、地域の消費者に鶏卵を直売する養鶏農家が増え、特色のある鶏卵が求められています。このため、開放鶏舎、ウィンドウレス鶏舎、平飼い鶏舎を用い、鶏種や飼養方法の違いが卵の品質や経営へどのように影響するかなどの課題をプロジェクト研究として調べています。

生産された卵の一部は、毎週水曜日に開催される「販売実習」で直売しています。名古屋コーチン、ウコッケイの卵は目玉商品として好評を博しています。また、委託加工した「名古屋コーチンプリン」も販売しています。

販売実習では、直接消費者と触れあうことで、消費者が求めていることを知り、販売ノウハウを学べる良い機会となっています。

なお、昨年度の本コースのプロジェクト「もみ殻に替わる新しい巣箱の敷料の検討」は、東海近畿ブロックの発表会で優秀賞を受賞しました。



実習販売でお客様に農大産の鶏卵をPR